

「ヴェニスの商人」を観て

小林 康男

劇団四季は2011年6月5日～6月26日まで自由劇場で「ヴェニスの商人」を上演した。筆者は6月17日に自由劇場に足を運び、浅利慶太演出、福田恆存訳の「ヴェニスの商人」を観た。「ヴェニスの商人」を初めて舞台で観たのが、1989年8月の事である。場所はロンドンのフェニックス・シアター、演出はピーター・ホールであった。シャイロック役をダスティン・ホフマンが演じていた。この観劇の体験が、その後観る「ヴェニスの商人」の比較の基準になった。

福田恆存はこの芝居のシャイロックを「悪者は悪者として表現し、これをこらしめる芝居として素直に受け取る・・・」と述べている。筆者も、古典劇の受け取り方としては、それが正当なのであろうと考える。演出家は古典劇の人物に魅了され現代的解釈をしたくなる。そのことを福田恆存は警戒している。しかし浅利慶太は、この禁を冒してまでも、シャイロックを現代的解釈で演じさせたかったのだ。なぜなら、シェイクスピアの筆が、そのことを可能なまでに、シャイロックという人物像を造形しているからだ。この役に相応しい役者をだれにするかが問題となった。浅利はこの役を、平幹二郎を起用することで、現代的解釈に耐える演技者を獲得できたのである。平幹二郎は40数年前に浅利慶太演出の『アンドロマック』(1966年)のピリュス役を演じ、『アンチゴヌ』(1967年)ではクレオン役を、さら『ハムレット』(1968年)のタイトルロールを演じている。その後の活躍は、芸術選奨文部大臣賞を始め、数々の賞を受賞していることから分かるように、舞台俳優としては日本を代表する一人である。そして2011年劇団四季は、1977年以来の「ヴェニスの商人」を上演することになり、浅利は36年ぶりに平を劇団四季に迎えたのである。

平幹二郎のシャイロックは、人としての力強さを前面に出している。舞台に登場すると、他の役者が小さく見える。平の伸長が高いということもあるが、存在感が全く違う。このことは、フェニックス・シアターのダスティン・ホフマンも同じであった。背の低いダスティン・ホフマンが舞台中央にいと、回りの役者より一回り小さいが、演技力によって、聴衆には大きな存在となった。それは役者の演技と共に、演出の効果がそうさせたのである。舞台のどの場に立つか、どの方向を見るか、どのように台詞を言うか、全て演出家・浅利慶太やピーター・ホールの演出から導きだされている。

本来この作品は、ユダヤ人の悪徳商人シャイロックが、善良なヴェネスの商人アントーニオを大いに苦しめる物語である。そして、最後には法学博士に変装したポーシャによってシャイロックは、裁判の場で懲らしめられる。ヴェネス人であるキリスト教徒が善人で、ユダヤ人が悪人という設定で、最後に勧善懲悪で大団円を迎える。このような筋書きの中でユダヤ人であるシャイロックは、すごすごと舞台から消えていくのである。

現代の演出家は浅利もそうであるが、ピーター・ホールもシャイロックをユダヤ人であると共に、一人の人間として、演じさせている。つまりシャイロックを極悪非道の悪人として演じさせることが、はなはだ難しいのである。登場人物のサレーニオに「・・・ほうら、悪魔がやってきたぞ、ユダヤ人に化けてな」(3幕1場)と言わせている。シャイロックには「・・・ユダヤ人をなんだと思ってやがる？ユダヤ人に目がないか？手がないか？五臓六腑が、四肢五体が、感覚、感情、情熱がないとでも言うのか？キリスト教徒とどこがちがう、同じ食いものを食い、同じ刃物で傷つき、同じ病気にかかり、同じ薬でなおり、同じ冬の寒さ、夏の暑さを感じたりしないとでも言うのか・・・」(3幕1場)と言わせている。ユダヤ人であるシャイロックは、キリスト教徒に、差別を受けている。だがそれは如何なものかと、聴衆に問うている。つまり現代の聴衆がこの台詞を聴く時、聴衆が逆に自分の心に自問自答せざるをえない台詞になっている。またさらに現代の聴衆は15、6世紀に生きたキリスト教徒が利子を取ってお金を貸す事は、罪

悪と見なされていたことを知っている。ユダヤ人は、キリスト教徒がやらない貸金という仕事をやっていたことも知っている。現代では経済活動の中で貸金に利子が付きものであることは当然である。このことを知らない現代人はまずいない。

古典作品に寄り添った演出には、安心感がある。しかし聴衆の感覚を刺激しない。年月を経る中で、作品の理解は時代と共に変化する。聴衆の感覚に寄り添った演出が求められると言っても過言ではない。先に挙げた2人の演出家、ピーター・ホールも浅利慶太も、このことを肌で感じていたと思われる。それ故、シャイロックの演出を、極悪非道の悪人から迫害されるユダヤ人という視点で、演出したのではないだろうか。

この作品のプロットの一つに、ポーシャの求婚者が行う「箱選び」がある。金の箱、銀の箱、鉛の箱から求婚者に一つ選ばせ、その箱の中にポーシャの絵姿が入っていれば、結婚できるというものである。ポーシャの求婚者は箱を選ぶ前に、間違った箱を選んだら二度と、ご婦人に結婚を申しこまぬと誓いをしなければならぬ。バッサーニオはポーシャの求婚者として、見事鉛の箱を選び、ポーシャと結婚する。ポーシャもバッサーニオなら是非結婚したいと思う。3幕2場の田邊真也（バッサーニオ）と野村玲子（ポーシャ）の二人の澁刺とした、恋情豊かな演技は、観客を魅了する。二人の演技力は素晴らしい。しかしもう一つのプロットである、シャイロックの「人肉の証文」の裁判場面と比べると、あまりに軽い。この作品の面白さが第一に「箱選び」にあった時代があった。しかし、現代に生きる聴衆は、「箱選び」の軽さを思いながら、「人肉の証文」の重さを考えざるをえない。この作品を浅利慶太という演出家が、そのように我々見せているのだ。時代と共に演出は変わるが、この作品はその典型といえるのではないだろうか。

参考文献

『ヴェニスの商人』ウィリアム・シェイクスピア 小田島雄志訳 白水ブックス
1983年